

E-7 幼児死亡と家庭の役割
厚生省人口研 内野澄子

目的 幼児死亡の研究は、乳児死亡のそれに比較して著しくおくれていた。しかも、このような幼児死亡の特徴は、病気によらない死亡である「不慮の事故」によるものが今日では半分以上にも達していることを明らかにすることと、かつこの幼児死亡率の地域的特徴を明らかにすることにより、この死亡率の改善が家庭におけるきめの細かい監督、指導の必要であることを強調することを目的としている。勿論、地域社会の共同防衛や行政の適切な対応の必要であることはいうまでもないが、何よりもまず家庭の愛情のこもった幼児の指導、養育が望ましいことを指摘しておきたい。

方法 幼児の年齢別死亡数、死亡率の变化を人口動態統計(厚生省)により、昭和25年から53年までの29年間について分析を行なった。次いで、幼児死亡の死因別死亡数、死亡率についても分析を行なった。特に「不慮の事故」による幼児死亡率の地域的特徴を、第1次産業人口割合、人口集中地と人口割合、1人あたり自動車保有指数との相関関係の分析を行なった。

結果 (1)日本人の幼児死亡率は、今日人口千人あたり0.7(昭和53年)で、カナダ、フランスの水準にあるが、スウェーデンの0.4の約2倍である。(2)幼児死亡率は昭和25~53年間に10分の1以下に低下した。(3)死因別では「不慮の事故」が半分を占めるに至った。(4)幼児死亡率は農村果て高く、大都市果て低い。(5)「不慮の事故」による幼児死亡率は佐賀、山梨、鳥取果て高く、東京といった都市化地域で著しく低い。といった事実がみられた。